日曜日に朝はない

笹沢左保

毎日新聞社

日曜日に朝はない

定価　五〇〇円

昭和四十七年五月十五日　印刷
昭和四十七年五月二十五日　発行

著者　笹沢左保
編集人　浜田琉司
発行人　朝居正彦
発行所　毎日新聞社

〒100　東京都千代田区一ツ橋
〒530　大阪市北区堂島上
〒802　北九州市小倉区紺屋町
〒460　名古屋市中村区堀内町

印刷　東京ベル印刷
製本　光和製本

0093—400060—7904

目次

日曜日に朝はない……5
炎の箱……87
闇への疾走……121
夜の賭け……163
怪奇の移転……199
霧に消えた影……233

装画　鶴岡義雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日曜日に朝はない

日曜日に朝はない

月曜日――。

十二月初旬の風は、冷たかった。肌に感ずる冷たさだけではない。目で見る冷たさもあった。どんよりとした曇り空である。灰色の厚い雲は、まったく動かない。それより低い空にある黒いちぎれ雲が、かなりの早さで西から東へと移動している。

銀杏の並木の梢が、曇天の下で震えている。まだ黄色い葉が、残っていた。しかし、散った葉も多かった。広い舗装道路の両端に、銀杏の葉の黄色い絨毯が敷き詰められていた。中央に散った葉は、風が吹きつける度に路上を戯れるように滑って行った。両端の黄色い絨毯も、舞うようにしてまくれ上がった。

列を作って駐車している乗用車の屋根の上にも、銀杏の葉が散っていた。その男は、駐車している乗用車の列に沿って歩いて来た。神宮外苑を背景にしている、青山通りへ向かって歩いて来る。白っぽいダスター・コートを着て、左手にクリーム色のスーツ・ケースを提げていた。

大分古ぼけていて、あちこちが痛んでいるスーツ・ケースだった。ダスター・コートも、よれよれであった。男は、長身であった。三十前後に見えた。彫りの深い顔立ちだった。眼差しが暗かった。陰鬱な感じである。無精髭がのびていた。風がダスター・コートを舞い上げ、油っ気のない男の髪の毛を嬲った。男は目を細めた。

歩きながら男は、右手をダスター・コートのポケットに入れた。つぶれたようなタバコの箱を摑み出した。だが、ポケットから出て来たのは、それだけではなかった。タバコの箱と一緒に飛び出

したものが、路上へ落ちた。折りたたまれたナイフだった。登山用のナイフである。

路上に落ちたナイフは、勢いよく滑って行った。男はそれを追って、二、三歩道路の中央へ出た。とたんに、キーッとタイヤの軋る音が響き渡った。通行人が一斉に振り返り、行き交う車の何台かが、スピードを緩めた。男を避けて急停車したタクシーの窓から、運転手が顔を突き出した。

「気をつけろ、馬鹿野郎！」

運転手が、もの凄い形相で怒鳴った。しかし、その男は、何の反応も示さなかった。表情も変えず、自分には関係ないといった顔つきであった。男はナイフを拾い上げると、コートのポケットへ戻した。そのまま男は、何事もなかったように歩き出した。

「何だい、あの野郎」

運転手は舌打ちをして、窓から首を引っ込めた。タクシーは、乱暴にスタートした。長身の男は、青山通りへ出ると右に折れた。青山通りは、車で埋まっていた。歩道を、背を丸めた通行人が足早に歩いて行く。年末にはまだ間があるが、やはり師走の慌しさであった。

夕暮れが近いということもあった。曇天なので、黄昏の暗さが早く訪れる。反対側のレストランは、すでに夜と変わりない照明をほどこしている。そうした街の表情に、その男だけが無縁の存在だった。男はやがて、足をとめた。『青い花』とまだ電気を入れてないネオンがあるスナックの前である。

表が赤煉瓦造りで、枠を白く塗った窓があった。男はその窓から、店の中を覗き込んだ。人の姿

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が動いている。男はアーチ形の入口の、木製のドアを押し開いた。店の中は、薄暗かった。天井に嵌め込まれた小さな四角いガラスの中で、赤茶けた電燈が形だけの光を散らしていた。

テーブルの席が五つほど並び、あとはカウンターだけである。カウンターの上に、鈴蘭の形をした笠に包まれた照明があった。カウンターの中で、女みたいな青年がグラスを磨いていた。客は、ひとりしかいなかった。カウンターのいちばん奥の端に、その客は席を占めていた。

銀色の靴に黒いスラックスをはき、黄色っぽいラメのルパシカみたいな服を着ていた。長めの髪の毛を、無造作に垂らしている。その髪の毛に隠れて、女の顔は見えなかった。女の前のカウンターには、ブランデーのグラスが置いてあった。

「いらっしゃい」

カウンターの中の美青年が、気のない声で言った。男は、カウンターの中央の止まり木に腰を据えた。男はまず、タバコに火をつけた。それから背広の内ポケットを探って、掌の上に幾つかの硬貨を並べた。十円硬貨が六枚と、百円硬貨が一枚しかなかった。

「これで、コーラか何か飲めるかい」

男は硬貨を、カウンターの上に置いた。低い声までが、陰気であった。女が頬杖を突いたまま、男のほうへ顔を向けた。その女もまた、沈んだ顔だった。大きな目に、翳りがあった。笑うことを知らないようなその表情には、神秘的な冷たさが感じられた。

カウンターの中の青年は、無言でコップにコーラを注いだ。それから青年は百円硬貨と、五枚の

十円硬貨を拾い上げた。カウンターの上に、十円硬貨が一枚だけ残った。男はそれを指先で弾いて、掌で受け止めるとポケットの中へ入れた。
「ところで、ちょっと訊きたいことがあるんだ」
男はコーラを半分ほど飲んでから、カウンターの中の青年に声をかけた。青年は、返事をしなかった。侮蔑するような目で、男を見やっただけだった。
「パール・ハウスというアパートを、知らないかね」
男はタバコを、灰皿に押しつけてねじった。
「さあ……」
青年は考えようともせずに、首をかしげて見せた。
「北青山二丁目にあると、聞いて来たんだが……」
男は、床に置いてあるスーツ・ケースに目を落とした。
「知りませんね」
青年は、素っ気なく答えた。男は、頷いた。飲み残しのコーラに、目を据えていた。考え込む目であった。ふと、女が立ち上がった。女はカウンターの上に、五百円札を置いた。
「毎度、どうも……」
青年が、女に笑いかけた。女は、それを無視した。女は歩き出して、男の背後を通りすぎた。その瞬間に、女は男の肩を軽く叩いた。男が振り向いたとき、女はすでにドアのノブに手をかけてい

た。男は怪訝そうに、眉をひそめた。
「一緒に行かない？」
女が言った。無表情であった。
「どこへ？」
男は訊いた。
「パール・ハウス」
女は、ドアをあけた。
「知っているのかい」
男は素早く立ち上がると、スーツ・ケースを手にした。
「わたしが、住んでいるアパートよ」
女は、店の外へ出た。男が、それを追って行った。カウンターの中の青年が、二人を見送ってからペロリと舌を出して肩をすくめた。外へ出ると、女が先に立って歩いた。二十七、八だろうか。歩き方にも、表情がなかった。脇見もしないし、その形のいい歩き方には一定のリズムがあった。
女は細い道を、右へはいった。三、四階建の新しいビルと、古い和風の住宅が入りまじって並んでいた。左側に、小さな駐車場があった。その駐車場の奥に、モルタル造りの横に長い建物が見えている。二階建であった。
二階と階下に、それぞれ四つのドアがある。八世帯がはいっているアパートだった。一戸建と変

わらず、直接出入りができるようになっている。新築の建物ではなく、むしろ古い感じであった。二階へ屋根つきの、鉄製の階段がついている。その階段の下で、女は男を振り返った。
「パール・ハウスの、誰を訪ねて来たの」
女は、冷ややかな目を男に向けた。
「浅野という人なんだ」
男は、暗くなった空を振り仰いだ。水滴が頬に触れたのである。どうやら、雨になるらしい。
「浅野新次郎さんね」
「そう」
「残念だけど、あの人もうここにはいないわ。十月いっぱいで、引っ越して行ったのよ」
「またか……」
「またかとは？」
「長野、福岡、神戸、そして東京と尋ね歩いて、その度に引っ越したあとだ」
「そう。一カ所に、落着けない人なのね。ここにも確か、三カ月ぐらいしかいなかったと思うわ」
「引っ越した先は、わからないだろうか」
「杉並のほうらしいわね」
「杉並か」
男は、目を伏せた。途方に暮れているのだろうが、男の暗い表情はそれらしく見えなかった。い

つの間にか、音もなく雨が降り出していた。駐車場を照らしている水銀燈の光の中を、細い銀色の線が絶え間なく走っていた。男は女に背を向けて、雨の中を歩き出した。

「どこへ行くの」

女が、声を投げた。男は、足をとめた。

「アテはない」

男は、背中で言った。

「あなた、お金がないんでしょ」

女の髪の毛にも、小さな水滴が無数に付着していた。

「さっき、見ていたんだな」

男は振り返って、女を上目遣いに見やった。額に皺が寄った。

「雨がやむまで、いてもいいのよ」

表情のない顔で言って、女は鉄製の階段をのぼり始めた。男は女をチラッと見てから、雨に濡れ始めた地上へ目を落とした。男はスーツ・ケースを持ち直すと、ゆっくり階段のほうへ近づいた。男は、階段を上がった。激しい風が、吹き抜けて行った。

女は二階の左端のドアの前に立って、バッグから鍵を取り出した。男は女の背後に立って、ドアの脇にあるネーム・プレートを見た。そこには、『白川』とあった。

「白川……」

男が呟くように、それを読んだ。
「白川麻由美よ」
ドアをあけながら、女が吐き捨てるように言った。
「高見沢だ」
男は、ドアの内側へ足を踏み入れた。

雨は、音を立てて降り続けていた。十二月にしては珍しい、本格的な豪雨だった。風も強い。思い出したように、豆をぶち撒けるみたいな音を立てて雨が窓ガラスを叩いた。高見沢礼一はガス・ストーブの前に佇んで、あたりを眺め回した。黒い背広の上下も、黒のトックリのセーターも、あまり新しいものではなかった。

部屋は、それほどせまくなかった。八畳と六畳の和室に、ダイニング・キッチンがついている。ほかに、トイレと浴室があった。和室にはそれぞれ、ブルーの絨毯が敷き詰めてある。ダイニング・キッチンだけが板の間だが、そこには何も敷いてなかった。

あまり整頓されているという感じではなかった。雑然としていた。家具が、多すぎるのかもしれない。六畳にはセミ・ダブルのベッドと本箱、それに三面鏡が置いてあった。壁には飾り棚が取り付けてあり、一メートル四方の外国のフォーク・ソング歌手の写真とギターが懸けてあった。

八畳のほうには衣裳箪笥、ソファ、テーブル、アーム・チェア、ステレオ、フロア・スタンド、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com